

原山遺跡発掘調査概報

1990年3月

大社町教育委員会

はじめに

原山遺跡は、昭和18年の発見以来、全国的にも注目され、九州系の弥生前期の土器や朝鮮系の無文土器などが出土しており、九州や朝鮮との交流を知るうえでも貴重な遺跡です。

また、昭和60年の調査では、山陰で最古の配石墓が出土し、再び脚光を浴びました。

このように、早くから注目され、数度にわたる調査が行われてきましたが、この遺跡については十分にわかっていないのが現状です。

この度の調査は範囲確認調査でしたが、さらに全面調査を実施し、この遺跡の性格と範囲を知ることは、町の文化財保護行政にとっても重要なことであり、今後、この遺跡の保存と活用を図っていくことが大切であると確信しています。

なお、調査にあたりご指導ご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げるとともに、本書が今後の文化財保護と郷土の歴史を知る資料としてご活用いただければ幸甚です。

大社町教育委員会

教育長 梶 谷 嶽

例　　言

1. 本書は、周知の遺跡である原山遺跡の発掘調査（部分）の概報で、該当部分における遺構の有無を確認することを目的に行った。
1. 調査地は、島根県簸川郡大社町大字修理免 373-1 番地
1. 調査は次の組織で行った。

調査主体者 大社町教育委員会 教育長 梶谷 嶽
調査指導者 島根県文化財保護指導委員 千家和比古
島根県教育委員会文化課
宮沢明久 内田律夫 鳥谷芳雄
大社町文化財保護審議会委員 大谷從二
調査担当者 島根県文化財保護指導委員 遠岡法暉
調査補助員 手銭弘明
調査協力員 祝部儀三郎 古福唯義 加藤逸平 前島和枝
河原啓子 春木英男 花田晶子 中山久夫
事務局 大社町教育委員会
教育課長 金山喜昭
課長補佐 児玉幹夫
主任 三成恭子
〃 柳楽一敏
主任 稲根克也
社教主事 佐藤隆夫
派遣主事 勝田治男

1. 調査期間は、平成元年6月3日から6月29日までである。
1. 発掘調査に際しては、土地所有者の河原一夫氏に多大のご協力をいただいた。
1. 本書の編集・執筆は、調査指導者の指導を得て遠岡法暉、手銭弘明、佐藤隆夫、稲根克也が行った。

目　　次

I 調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	1
III 調査の概要	4
IV ま　と　め	12

I 調査に至る経過

平成元年3月30日、本町建設課より西原荒神社南側の宅地に河原清義氏から建築の確認申請書が提出されたとの連絡があった。

これを受けて、教育委員会では申請地が原山遺跡の範囲内であったため河原清義氏及び土地所有者の河原一夫氏と遺跡保護について協議を行い、この場所における遺跡の実態を確認するために発掘調査を実施することになった。

そこで教育委員会では平成元年度の町単独事業として予算化を図り、平成元年6月3日より約30日間にわたり調査を行った。

II 位置と歴史的環境

原山遺跡は、島根県簸川郡大社町大字修理免字原の西原荒神社を中心とする砂丘地に所在する。^①その場所は北山の西南にあたり、遺跡の西北1kmには出雲大社が、西方1.5kmには日本海が広がる。荒神社の立地している丘一帯は原山と呼ばれ、北側には高浜川の流れる細長い沖積低地が島根半島との間に細長く存在する。一方、南側には出雲平野が広がり、古代においては『出雲國風土記』(733年編纂)に載る神門水海と呼ばれる周囲35里74步(18.84km)の入海がこの一帯に存在していた。

さて、出雲平野の北西部にあたる簸川郡大社町には、隣接する出雲市と同様に多数の遺跡が確認されている。遺跡は、第1図にみられるように原山遺跡の周辺にある砂丘や北山山麓の小規模な扇状地に集中している。^②

縄文時代の遺跡としては、菱根遺跡、出雲大社境内遺跡が知られ、前者からは早期・前期の、後者からは後期・晚期の土器が出土している。

弥生時代には、南原遺跡や船佐遺跡が加わり、人々は砂丘や小規模な扇状地に住み、付近の後背湿地で稲作を営んでいたと思われる。また、同時代の祭祀遺物としては出雲大社の東方200mの命主社境内から銅戈と硬玉製勾玉が出土している。^③

古墳時代に入ると、弥生時代の遺跡以外に鹿藏山遺跡や修理免本郷遺跡などの遺跡が新たに現れ、集落も徐々に拡大する。しかし、この地域は神門水海と北山に阻まれており、耕地も少なく、生産力は他の地域に比べ低かったと推定される。それはこの地域に古墳がほとんど知られていないことでもうかがわれる。

なお、律令時代には大社町一帯は出雲郡杵築郷に属していた。

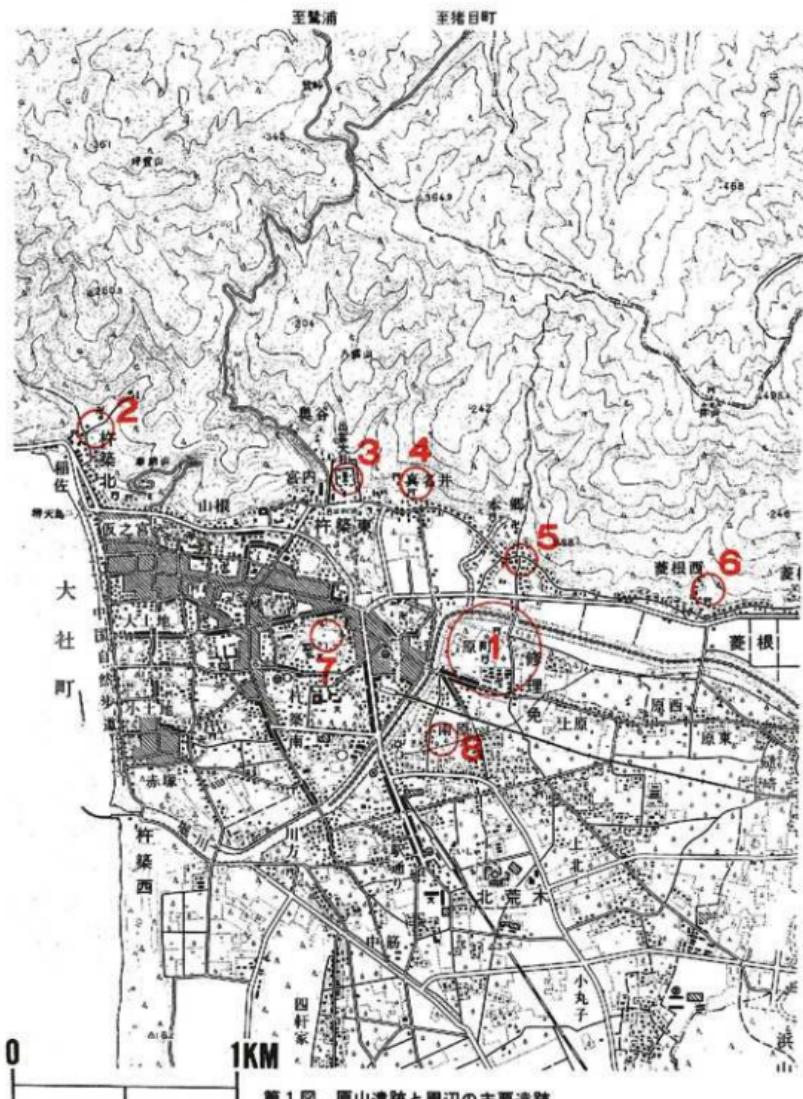
(註)

①村上勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第2冊 1979年

②穴道正年『島年県の縄文土器集成』I 1974年

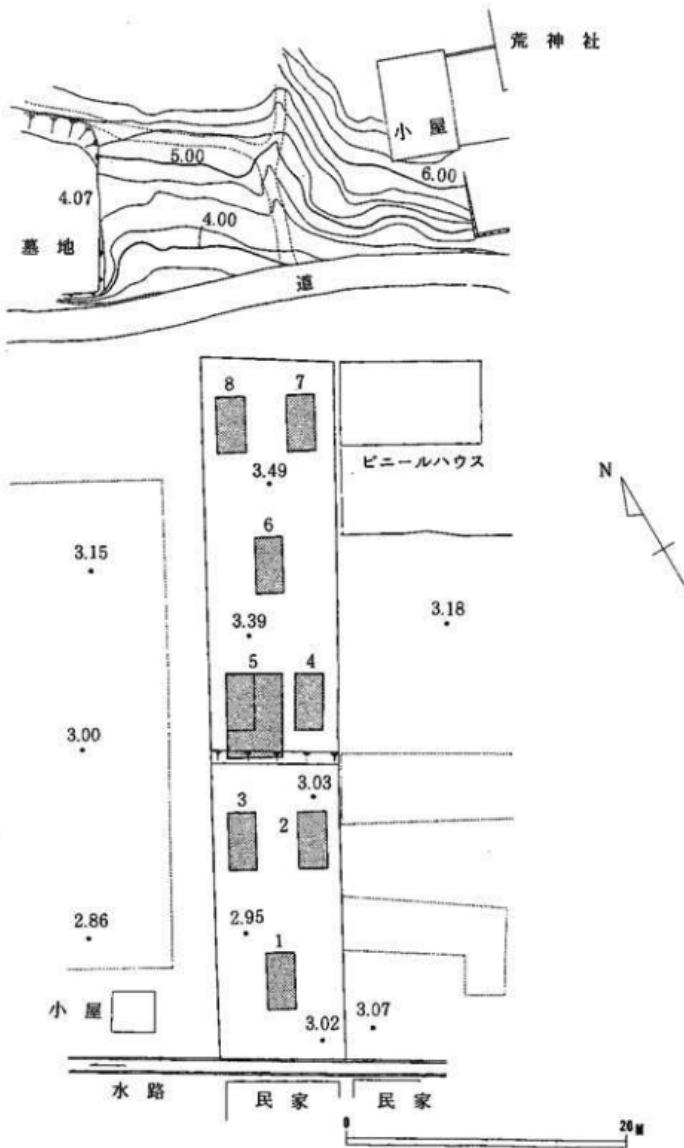
③近藤正「島根県下の青銅器について」『島根県文化財調査報告』第二集 1966年

④『鹿藏山遺跡』大社町教育委員会 1984年



第1図 原山遺跡と周辺の主要遺跡

- 1.原山遺跡
- 2.稻佐遺跡
- 3.出雲大社境内遺跡
- 4.真名井銅戈出土遺跡
- 5.本郷遺跡
- 6.菱根遺跡
- 7.鹿藏山遺跡
- 8.南原遺跡



第2図 調査区トレーニング配置図

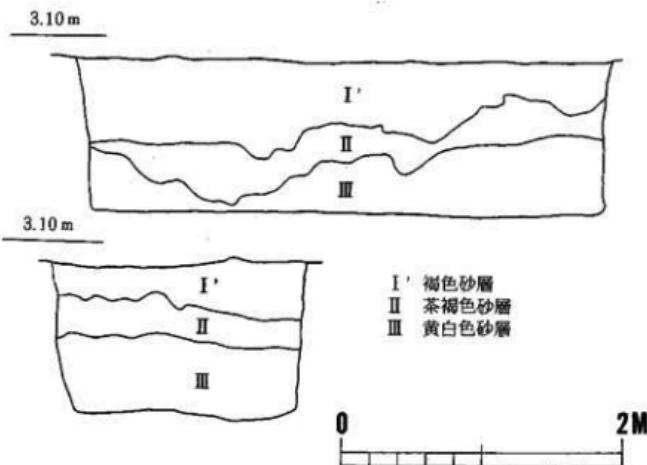
III 調査の概要

今回の調査地は、荒神社の南西約50mに隣接する巣川郡大社町大字修理免字原の河原清義氏宅の住宅建設予定地にあたる。ここは、もと畠地であったところを近年、河原氏が宅地に転用するため約30cmの盛土を行い、整地されたところである。

調査区の面積は450 m² (9×50m) で、長さ4.0m、幅2.0mのトレンチを8本設定した(第2図参照)。

(1) 第1トレンチ

第1トレンチは、地表下約30cmまで畠地時の耕作土である茶褐色砂層(I'層)があり、その下には黄褐色砂層(II層)が約80cm存在する。また、その下層は黄白色砂層(III層)となり、地表から約1mを掘り下げたが土層の変化は認められず、遺構や遺物も検出することもできなかった。



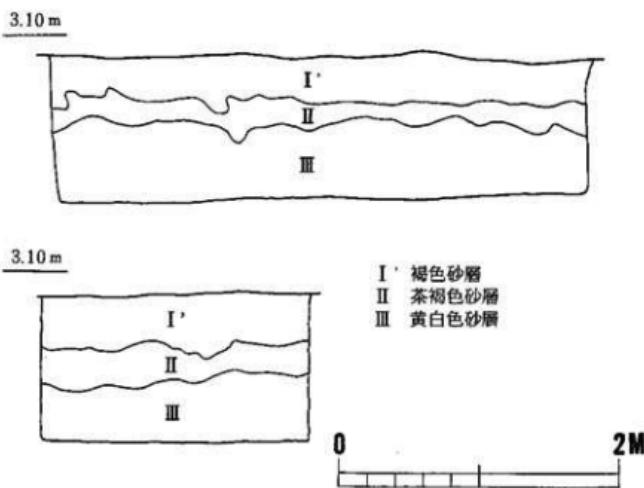
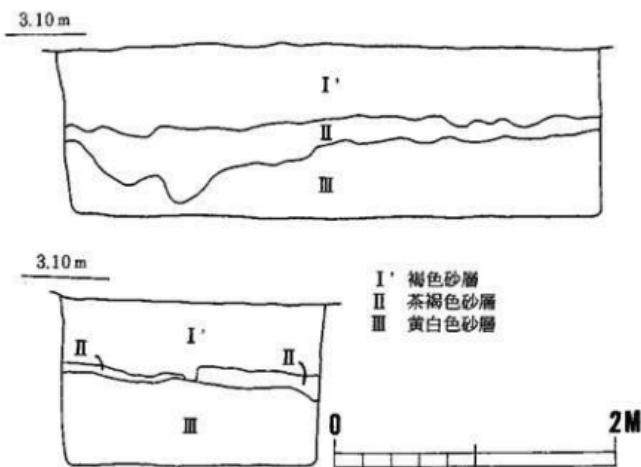
第3図 第1トレンチ土層図(東・南壁)

(2) 第2トレンチ

第2トレンチの土層の層序は第1トレンチと同様で、上から茶褐色土層(耕作土:I'層)、黄褐色砂層(II層)、黄白色砂層(III層)となる。黄白色砂層は部分的に砂粒の粗いところがみられ東壁断面では、帯状の粗粒砂層が南から北に下向する。地表から約1mまで掘り下げたが、遺構、遺物とも検出できなかった。

(3) 第3トレンチ

第3トレンチも、層序は第1、第2トレンチと同様である。地表から約1mまで掘り下げたが遺構、遺物とも検出できなかった。また、トレンチの西北端を更に約1m掘り下げたが、土層(III層)の変化は認められなかった。

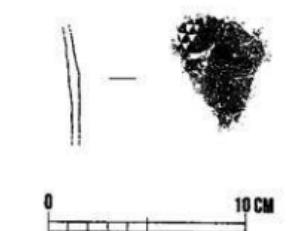


(4) 第4トレンチ

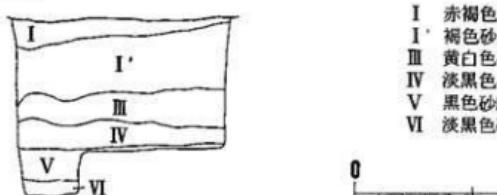
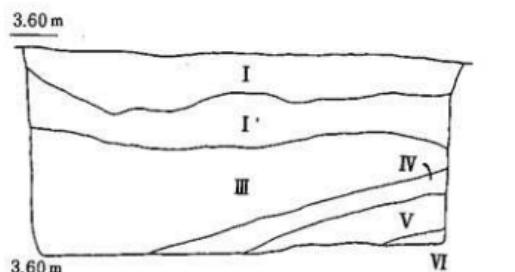
第4トレンチは地表下約70cmまでは、最近盛土が行われた赤褐色土層（I層）及び耕作土である茶褐色砂層（II層）があり、I'層の下場ラインはほぼ水平となっている。その下は、黄白色砂層（III層）である。

層)で、層の堆積は北側で2.0m、南側で1m以上となっており、層の下面ラインは南から北に緩やかに下方へ傾斜する。その下層はこのラインと平行して黒色砂が堆積しており、淡黒色砂層(IV層)、黒色砂層(V層)、淡黒色砂層(VI層)と層の色調が漸移する。

遺物は茶褐色砂層(I'層)から摩耗の著しい土器の細片が11個出土している。この中には弥生時代中期に属すると思われる壺片が1個ある。表面には三角形の刺突文が2段以上認められる。V層からは土器片が1個発見されているが、時期等の詳細は不明である。



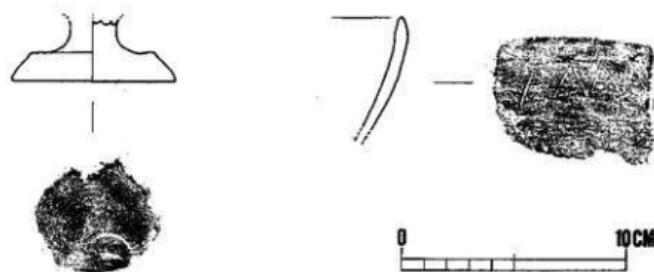
第8図 第4トレンチ出土遺物実測図



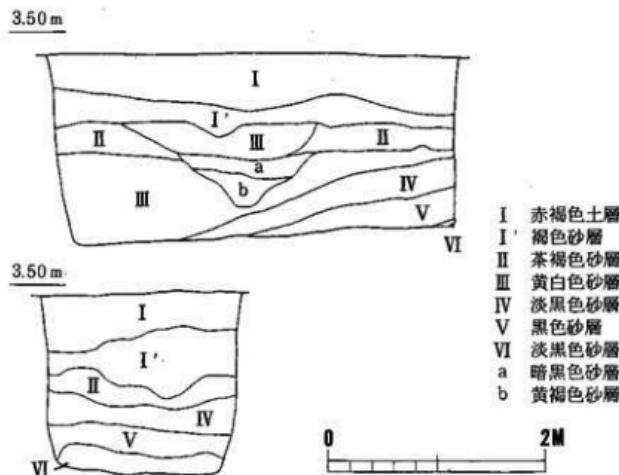
第7図 第4トレンチ土層図(東・南壁)

(5) 第5トレンチ

第5トレンチでは、表土下70cmにおいて径1.5m、深さ80cmの落ち込みを検出した。内部には黒色土があり、陶器片や土器片が若干出土している。この遺構は、昭和30年代頃まで使用されていた綿井戸であると近所の人は言っている。また、この遺構を挟んで上層(II層)からは土器細片が少量出土しているが、時期等が判明するものは存在しない。一方、下層(V層)からは縄文土器、弥生土器、土師器の破片が9個出土している。また拡張部分から弥生土器、土師器、土師質土器が20片近く出土している。その中には弥生土器の底部や土師器の杯で外面にヘラがきによる鋸歯文を施したもの、及び脚付杯の土師質土器等も混じっている。



第8図 第5トレンチ出土遺物実測図

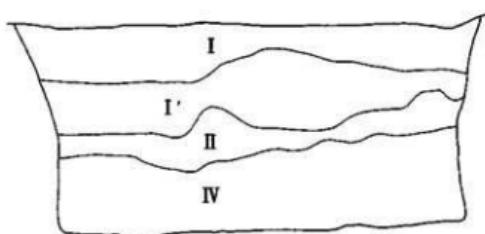
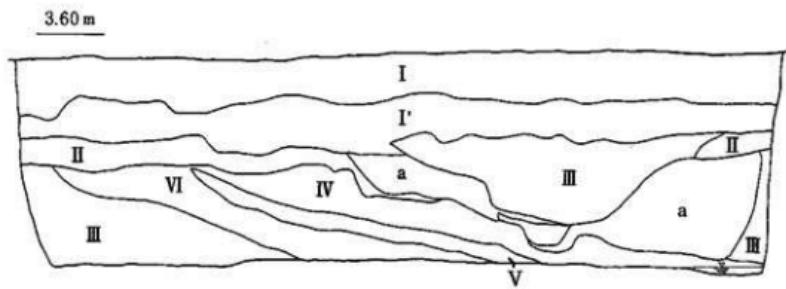
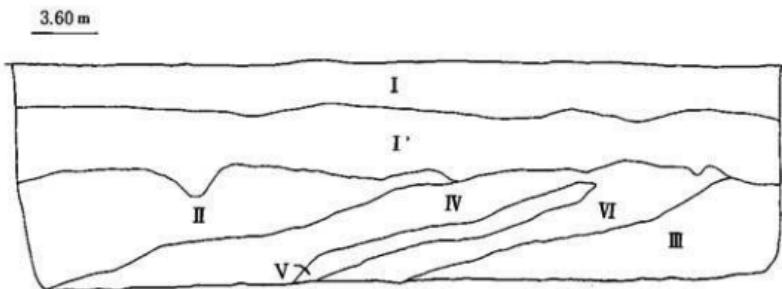


第9図 第5トレンチ土層図(東・南壁)

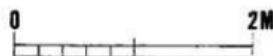
(6) 第6トレンチ

第6トレンチは、上から順に厚さ約30cmの赤褐色土層（I層）、厚さ約30cmの茶褐色土層（I'層）がほぼ水平に存在する。その下には厚さ約50cmの黄褐色砂層（II層）がこれもほぼ水平に堆積し、下層には黄白色砂層（III層）がある。更にトレンチの北西隅を部分的に掘り下げたが層の変化は認められず、地表下約1.7mで地下水が湧出してきた。

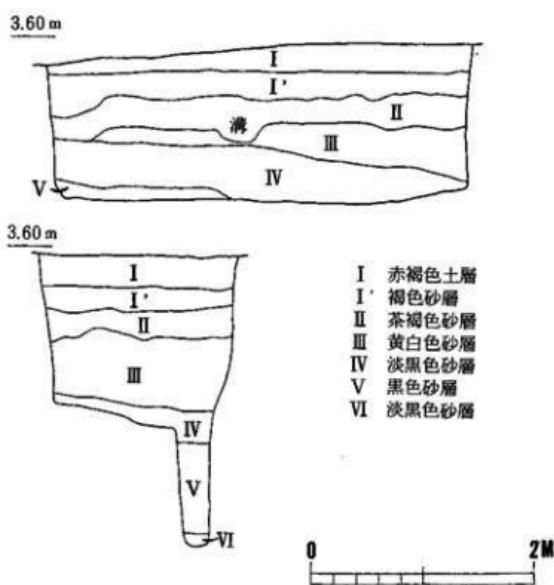
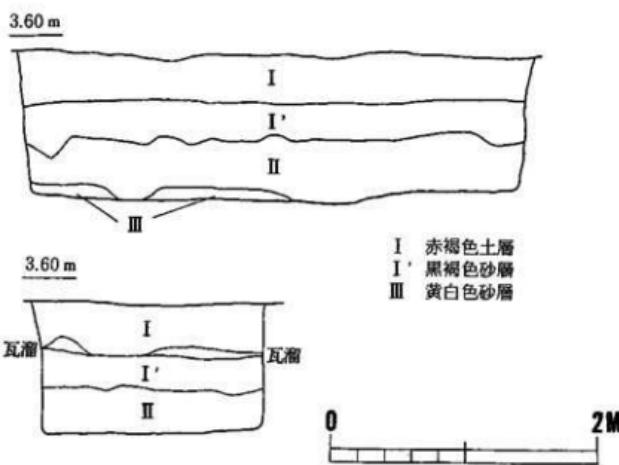
遺物としては、II層から須恵器（甕片）1個及び弥生土器、土師器の破片や細片が70片あまり出土している。また、その他には長さ4cmの鉄製二股やすが発見されている。



- I 赤褐色土層
- I' 棕色砂層
- II 茶褐色砂層
- III 黄白色砂層
- IV 淡黑色砂層
- V 黑色砂層
- VI 淡黑色砂層
- a 暗黑色砂層
- b 黄褐色砂層



第10図 第5トレンチ拡張部分土層図(東・西・南壁)

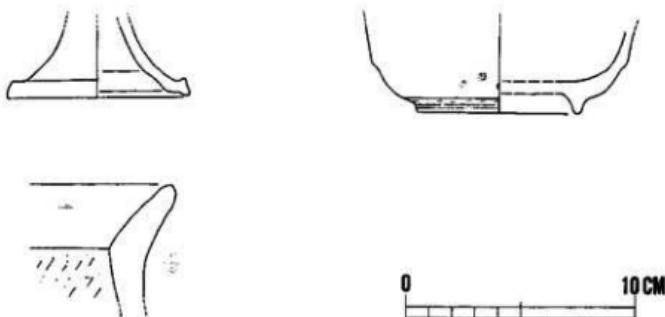


(7) 第7トレンチ

第7トレンチでは、赤褐色砂層（I層）30cm、茶褐色砂層（I'層）20cmの下に遺物包含層である黄褐色砂層（II層）が厚さ約20cmで存在し、その下に第III層の黄白色砂層がある。この層は厚さ15～30cmで、トレンチの北壁から約30cmのところから始まり、南側に向かって下方に緩やかに傾斜し、層幅も徐々に厚くなっている。その下には黒色砂が第IV層の傾斜面とほぼ平行に淡黒色砂層（IV層）、黒色砂層（V層）、淡黒色砂層（VI層）が堆積する。層の厚さはトレンチ南側でIV層30cm、V層80cmとなっている。

遺構としてはトレンチ中央部を東西に幅30cm、深さ15cmの溝状のものがIII層を掘り込んだかたちで確認された。

遺物は、II層から黒曜石片、鉄製釣針各1個と土器細片が20個近く出土している。また、IV層からはパイプ状の鉄片1個と布志名焼などの陶器2片及び織文土器、弥生土器、土師器等の土器片約70個が、V層からは須恵器片3個と弥生土器や土師器などの土器片40数個が出土している。



第13図 第7トレンチ出土遺物実測図

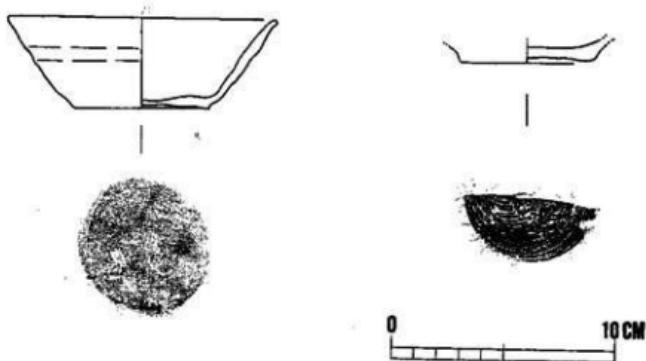
(8) 第8トレンチ

第8トレンチは、赤褐色土層（I層）約30cm、茶褐色土層（I'層）20cmの下に黄褐色砂層（II層）が20～40cm存在する。その下層には第7トレンチと同様に黄白色砂層（III層）が厚さ20cm、淡黒色砂層（IV層）が厚さ30cm、黒色砂層（V層）が40cmで、淡黒色砂層と共に南側下方に緩やかに傾斜しながら堆積している。

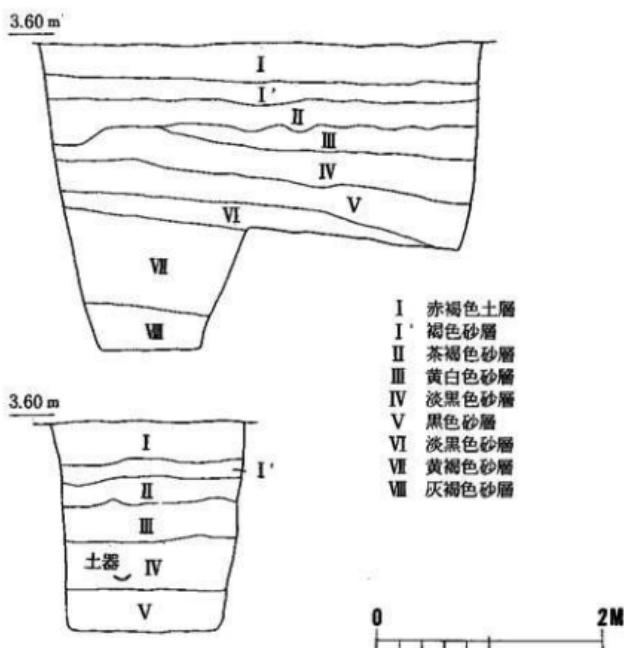
遺構としては、第7トレンチで検出した溝状遺構が第III層でトレンチ中央付近に東西に走っていることが確認された。しかし、その性格等は不明である。

遺物は、II層から古銭（銹色著しく文字不明）、伊万里系皿片各1個及び織文土器、土師器、土質土器等の細片約160個が出土している。また、同層下層部からはほぼ完形となる土質土器（楕）が発見されている。この楕は口径12.0cm、器高4.1cm、底部径6.0cmを測る。体部は、やや外へ開きながら立ち上がり、底部は回転糸切り痕がある。V層からは、後期に属する弥生土器（窓片）1

個と須恵器 5 片（壺片）及び土師器、土師質土器片約 100 個が出土した。



第14図 第8トレンチ出土遺物実測図



第15図 第8トレンチ土層図(東・南壁)

IV ま と め

原山遺跡の中心地点と目されるのは、西原荒神社を中心とした区域であるが、この度の調査地はその南西の平坦地である。

調査の結果については、調査の概要で述べたとおりで、弥生時代及びその前後の時代のものを含めて、遺構と認められるものは検出されなかった。

遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器及び陶磁器、黒曜石片、古銭、鉄製漁具などを各時代の各種のものがあるが、これらは多くの土層で時代の異なるものが混交して出土しており、土器は器種、部位の判断ができる細片が多い。

このような状況から、この度の調査地には遺構は存在しないと判断される。遺物については、周囲から二次的な移動（流入を含めて）あるいは偶然的な遺棄などによってもたらされ、また後世の耕作で、破碎・攢乱されたものと考えられる。

検出された唯一の遺構といえば、第5トレンチの綿井戸跡である。綿井戸は以前は隨所に存在したということであるが、綿栽培が行われなくなり、またパイプによる給水が行われるようになって井戸が使われなくなった現在ではほとんど埋没してしまい、その所在すら確認できない状況である。幸いに地元の人のご教示で、近くでその跡が凹地になって残っているのを実見することができたが、大きさは検出されたものとほぼ等しいものであった。

図 版



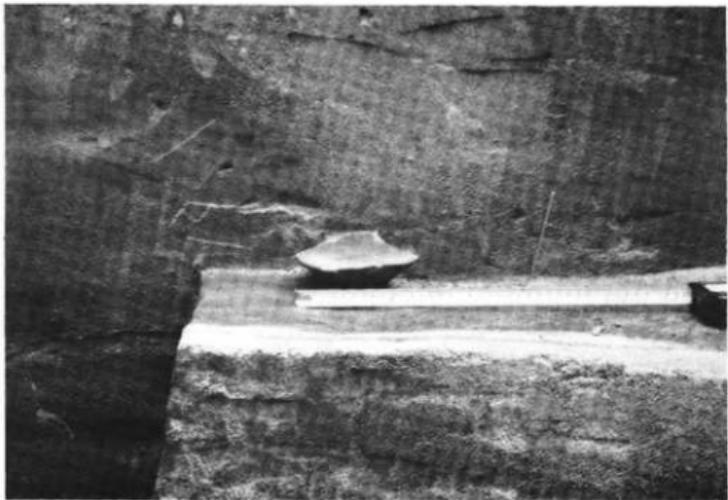
原山遺跡発掘調査区全景(北から)



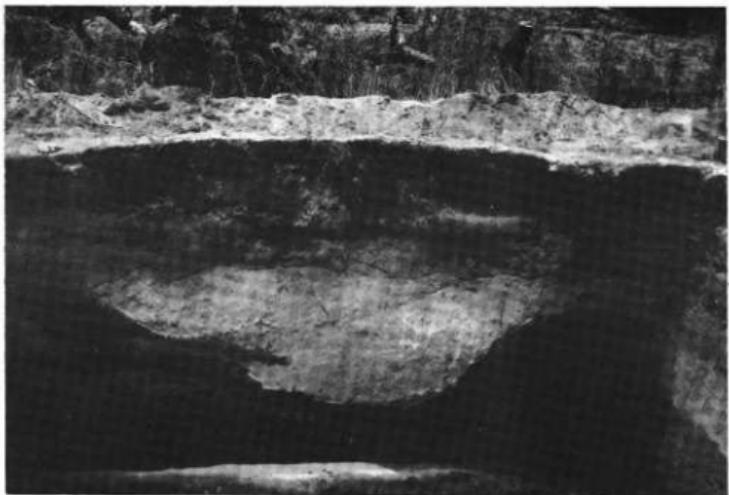
原山遺跡発掘調査区全景(南から)



発掘風景



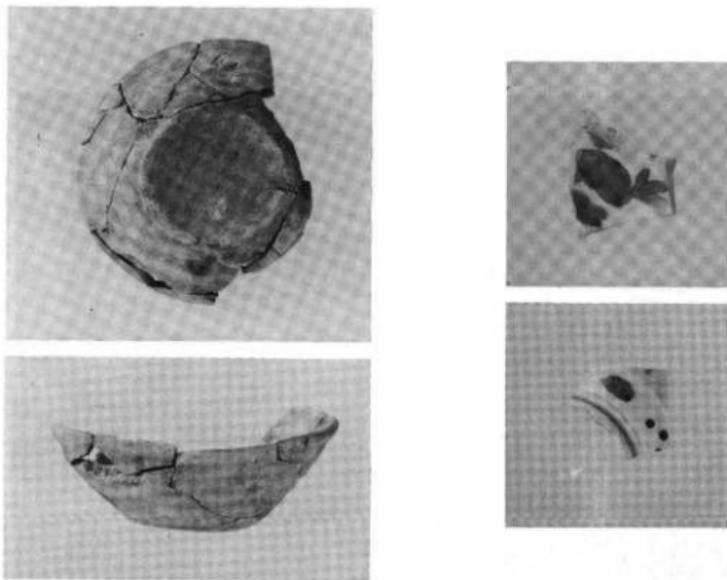
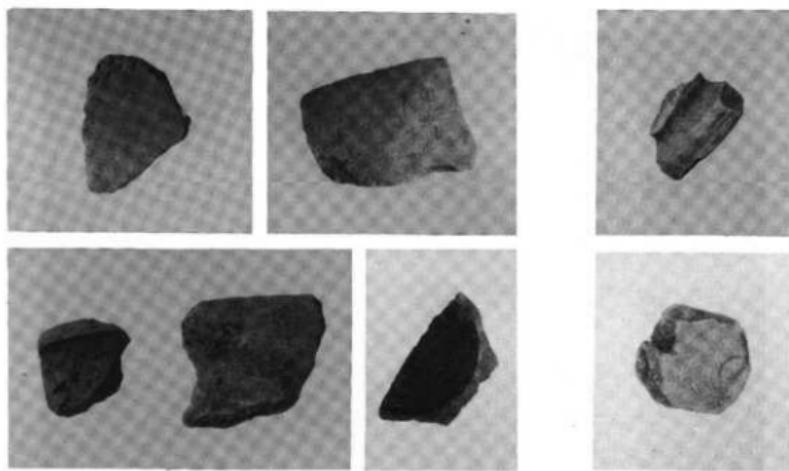
遺物出土状況



綿井戸跡遺構（第5トレンチ）



綿井戸跡（石田敬氏宅前）



出土遺物

1990年3月発行

原山遺跡発掘調査概報

発行 大社町教育委員会
島根県簸川郡大社町杵築南

印刷 大社プリント
島根県簸川郡大社町杵築西